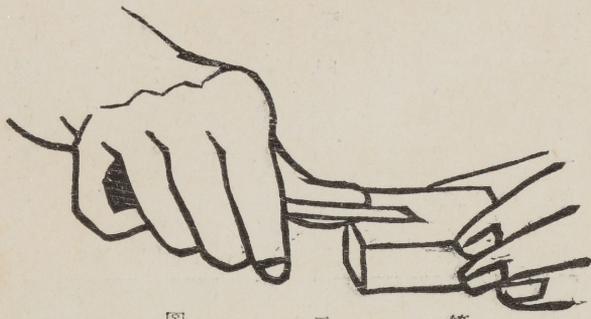


明治四十年八月三日發兌

版のなごさみ

木口木版(承前)

山本 鼎



第二圖

刀の持ち法は第二圖に示すが如くで、母指を定木の心持に構え、重に小指を働かして彫るものである。示す所の第五圖は、最初畫用紙に畫いたもので、第三式の^{フラセット}轉寫に依たものである。それでまづ、Aの刀を把つて第三圖の如く凸存すべき線のまわりを彫り、次にはYの鑿を以て、第四圖の如く不用の部分を深さ一分位に彫り、去り、次にはFとDの刀を用ひて、不用の部分を全くとり去つてしまつたのである。而して第三圖Aの所はB若くはCの刀を用ひ、Bの所はEの刀を用ひたのである。若し夫れ様々に濃淡を現さむとならば、彫り洩う線の太細彫り残す線の太細及び單線と從横彫刻との技術に由る。亦物質の表現の如きに至つては練熟の餘に自から覺得するの他、口や文字では説明し難い所である。唯、A、B、Cの如き尖を有する刀は、能く一本の刀を以て其運動しかたにより、種々の濃淡を彫り現す事が出來、其線はE、Dの如き刀の線に比して遙かに、變化に富むだ面白味のある者である。そうして極めて精緻な者を彫刻するには、専門家は七十本近くの刀を使用するそうである。未だ其趣味を

知らぬ人に

は變手古な第

事でもあら三

うが、愛好者圖

にあつては

で、亦自から風格の異を放つて居

麗典雅なう

れりを持つて第

おり、獨逸の四

ものは細い圖

硬直な、ざら

アート、ヲブ、ヲバ、タイム』に於て

『ニコルソン』式木版

ニコルソン

氏の版畫は第

全く創作的五

のものであ圖

つて、自畫自

ではなく、唯黒と、白との團であつて、構配上の裝飾畫的線美が其極致であり、技術は其構圖の後

を受けて、刀畫的彫凌の巧を振ふにありて、複製的分子は、自から其處に消滅せればならぬので



繪畫の構成されて居る一本々々の線が、非常な注意と、深い趣味を以て鑒賞されるので、見る者に愉快な感覺を興さしむる所の一線一點が寄り集つて、一種の風貌を備へて居る『版畫』といふ者、特に、鐵針の尖から描き出された緊勁な線は僕の最も好愛する所である。風土人情の異なる所、微々たる木版の線にまゝしたのは面白い、其佛蘭西のものを見るに、肉付のよい單線が、優しくしたやうな線で、米國のは細くして軟く、味のある。一種練絹のやうな牙えを持つて居る。併し僕の見たのは大概複製的の企圖に成つた版畫であつて、自畫自刻、若くは創作的な考へて作られた版畫は、不幸にして未だ多く見る事を得ない。只僅かに、木口木版と思はれる創作的の版畫を『レプレゼンタチーブ、見たのみである。

刻といふよりも、寧ろ『刀畫』と云ふ方が適切な位である。氏の版式は頗る簡單である、之を素人の慰みとせむに、木口木版よりはたしかに好適であるう、彫刻術も彼に比して、之は餘程修得し易く、器用な人には、直ちに版畫を試みる事が出来るのである。ニコルソン氏版畫の形式は、明暗が線の聚つて成つた濃淡

